

児童期の子どもをもつ母親の子育て不安について

——小学校1年生から3年生をもつ母親を対象とした子育て不安の構造——

保 母 遥

第1章 問題と目的

第1節 子育てを取り巻く社会環境の変化

日本の母親の多くが「子育ては楽しみや生きがい」であると肯定的に感じていると同時に、半数以上が「子育てはつらく苦勞が多い」と否定的にも感じているという実態が明らかとなっている（武内，2004）。このように、現代の母親たちが感じている子どもや育児に対する否定的な感情は，“育児不安”あるいは“育児ストレス”などと呼ばれる（荒牧・無藤，2008）。育児不安や育児ストレスは、「育児による疲労感や気力の低下，イライラ，不安，悩み等が解消されず蓄積されたままになっている状態（牧野，1983）」が続くと，育児ノイローゼや虐待につながる恐れがある（村上・飯野・塚原・辻野，2005）。

現代は，都市化が進んだことで核家族が増え，地域社会とのつながりが少なくなっている。さらに，晩婚化や未婚化による少子化や，共働き世帯の増加による社会環境の変化が，子育てに関する不安やストレスを増大させている背景であると考えられる。

第2節 育児不安についての研究

育児不安についての研究は数多くされているが，そのほとんどが主に乳幼児や未就学児を持つ母親に関して述べたものである。児童期の特徴から考えると，集団で過ごす時間が長くなり，6歳から12歳までの6年間で身体的成長のみならず，知的・心理的にも大きな成長を遂げ（小野寺，2009）ることから，子どもが成長していくことによって母親の不安も変化していくと考えられる。特に低学年は，就学することの節目となるため，学業，教師や友人との関わりなどといった児童期以降の子どもをもつ母親にも子育て不安があるのではないかと考えられる。

一般的に用いている育児不安や育児ストレスの定義は様々であり，同義として扱われていることが多い。興石（2005）は，育児不安の定義として，「乳幼児を抱える養育者に，育児に関連して感じる日常のささいな混乱が蓄積された結果生じた，否定的な情動，育児への統制不能感」としている。

第3節 子育て不安の定義

本研究では，児童期の子どもを持つ母親を対象としているため，“子育て不安”とし，「児童期の子どもをもつ母親が子育てに関して抱くネガティブな感情」を定義とする。具体的には子どもに関する心配事，子育てにまつわるストレス，家事などの日常生活から生み出されるストレス，母親が子育てに関して感じる疲労感，育児意欲の低下など（吉田，2012）を含む。

乳幼児期の子どもを育てる母親の育児不安の構造に関する研究は，今までに数多く行われている。榊原（2004）によると，乳幼児の育児不安の材料は，栄養に関するもの，発達や成長に関するものがあると述べている。これらは，乳幼児期特有のものであると考えられる。

一方，宮脇・山本（2006）は，思春期（中学2年生）の子どもを持つ母親の子育て不安尺度を作成しており，思春期の子どもを持つ母親が抱く子育て不安として，友達関係と子どもへの対応についての不安，夫と周りの人からのサポートについての不安，学校生活と子どもの行動についての不安という思春期特有の子育て不安がある

と報告している。その中でも思春期特有の具体的なものとして、進路についての不安、子どもの第二次性徴に対する不安などが挙げられている。

児童期とは、幼児的な心性からの脱却と、思春期の自立への模索が始まるはざまに位置する(岩田・佐々木・石田・落合, 1995)。児童期の子どもを育てる母親の子育て不安は、特に子どもから生じるストレスの内容が乳幼児期とは異なると考えられる。乳幼児期と異なり、児童期前期の子どもは、母親から離れて、学校というコミュニティの中で生活する時間が増えるため、学業、教師や友人との関わりなどの不安を抱くのではないだろうか。また、幼児期よりも児童期では、友達との関わりが多く行動範囲が広がると予想されることから、登下校中の不安など、母親の目の届かない所での不安も抱くのではないかと考えられる。よって、児童前期の子育て不安の構造を検討する必要があると考えられる。

第 4 節 夫婦関係に関する研究

子育て不安の研究はソーシャルサポートとともに検討されることが多く、母親にとって周囲からのサポートは不安を緩和させることが示されている。特に夫からのサポートは重要であることが明らかにされている(寺見, 2015)。山口・佐藤・遠藤(2014)の研究によると、父親が母親の育児の苦勞をねぎらったり、心配事の相談に乗ることや母親を気遣うなど情緒的支援をよくするほど、母親の育児負担感は少ないことが示唆された。丸山・吉田・杉山(2004)は、夫の精神的、物理的サポートの欠如や夫との関係が女性の心身の健康に大きな影響を及ぼしていることを示唆し、子育て支援の基本的課題として夫婦関係は重要な視点であると述べている。

第 5 節 レジリエンスに関する研究

近年、ストレスフルな状況やネガティブな出来事を体験しても、そこから立ち直りを導く心理的特性としてレジリエンスという概念が注目されている(尾野・茂木, 2011)。レジリエンスの定義は多義的であるが、心理学的なレジリエンスの定義として、「ストレスのある状況や逆境でも、うまく適応し、精神的健康を維持し、回復へと導くもの」(枝廣, 2015)という点では共通している。本研究で扱う子育てレジリエンスは、Baraiser & Noack(2007)によると、母親のレジリエンスは、子育ての変化にうまくやっていく能力のことであると、母親として忍従することと受容することの相反する両面感情を受け入れることであると述べている。

国内において、子育て中の母親に関するレジリエンスについての研究はほとんど行われていないのが現状である。Travis & Combs-Orme(2007)は、子育てのレジリエンスは、人生の課題に成功する事や、困難にうまく対処すること、自分の子どもに良い子育てをすることを促すと報告している。国内では、尾野・茂木(2011)が障害児をもつ母親の子育てレジリエンスに関する研究を行っており、レジリエンスを備えた母親は、育児負担感が低く、自己効力感と精神的健康度が高いことが示された。以上から、子育てを行うにあたって子育てレジリエンスを持つことで母親の精神的健康度を維持する上で重要であると言える。

第 6 節 本研究の目的

本研究は、就学することの節目となり、幼児期の頃とは環境が大きく変化する、小学 1 年生から 3 年生の子どもを持つ母親を対象とする。これまで、子育てレジリエンスと夫婦関係満足度を含めた子育て不安に関する研究は行われておらず、子育てレジリエンスと夫婦関係満足度を組合せたグループによって、子育て不安にはどのような特徴があるのかについて明らかにしたいと考えた。そこで、児童期の子どもを育てる母親に焦点を当て、子育て不安の要因について検証するために子育てを行うにあたりどのような時にネガティブまたはポジティブな感情が湧くかについての自由記述を行い、子育てレジリエンスと夫婦関係の満足度の組合せたグループ(クラスター)における、子育て不安の内容の特徴について検討する。

第 2 章 方法

1. 調査対象者

岐阜県の小学校 3 校の小学 1 年生から 3 年生の親 268 名を対象に調査を行った。質問紙の回収数は 113 部であ

った（回収率 42.2%）。このうち、欠損値のあるデータを除いた全 107 名（母親の平均年齢：39（ $SD = 4.84$ ）歳）を分析対象とした（有効回答率 40%）。

2. 調査期間

2018 年 9 月から 10 月にかけて調査を実施した。

3. 調査実施手続き

本調査は、質問紙によるアンケート調査である。調査協力の得られた小学校の校長先生に、研究の目的、質問紙の回答が任意でありいつでも中止できること、無記名で回答してもらってから封筒に入れて回収するため、プライバシーが保護されていること、研究終了後には、回収した紙媒体の資料はシュレッダーで処分し、電子データは保管用 USB を初期化すること、質問紙の表紙にある、研究に同意するか否かのチェックボックスに印をつけてもらうことが回答者からの同意を得たことになることを説明した。その後、子どもを通じて封筒に入れて保護者に配布し、家庭で回答を求めた。回答後は、封筒の封を閉じてもらい、子どもを通じて回収した。

4. 質問紙の構成

(1) 子育て不安の自由記述

「子育てを行うにあたって、どのような時にネガティブな感情が湧くか」「子育てを行うにあたって、どのような時にポジティブな感情が湧くか」について、家や学校など各場面で思いついたことを自由に記述してもらった。

(2) 子育てレジリエンス尺度

尾野・奥田・茂木（2011）により作成された尺度を用いた。27 項目について 4 件法で回答を求めた。

(3) 夫婦関係満足度尺度

諸井（1996）により作成された尺度を用いた。6 項目について 4 件法で回答を求めた。

(2) 基本的属性

回答者の年齢、子どもの学年、子どもの性別、子どもの数、他の子どもとの関係性（兄弟構成）、育児経験の有無について尋ねた。子どもの性別と子どもの学年と兄弟構成について、対象年齢の中に複数の子どもがいる家庭においては複数回答にした。

第 3 章 結果

第 1 節 単純集計

回答者の基本情報における単純集計を行った（表 1）。

第 2 節 各クラスターにおけるネガティブ感情の自由記述の特徴

母親の子育てレジリエンスと夫婦関係満足度の組合せたグループ（クラスター）における、子育て不安の内容の特徴について検討するために、子育てレジリエンスと夫婦関係満足度を組み合わせた得点を標準化し、クラスター分析を行なった（図 1）。

K-means 法による、非階層的クラスター分析を行った結果、3 類型が抽出された。クラスター 1 に 17 名、クラスター 2 に 68 名、クラスター 3 に 22 名が振り分けられた。クラスター 1 は、夫婦関係満足度は高いが子育てレジリエンスが低かったため、「レジリエンス低夫婦関係満足度高群」と命名した。クラスター 2 は、夫婦関係満足度も子育てレジリエンスも共に高かったため、「レジリエンスおよび夫婦関係満足度高群」と命名した。クラスター 3 は、夫婦関係満足度が低く、子育てレジリエンスが高かったため、「レジリエンス高夫婦関係満足度低群」と命名した。

次に、各クラスターにおいて子育てレジリエンスの違いを調べるために、1 要因分散分析を行なった。その結果、クラスターによる違いが確認された（ $F(2,104) = 52.58, p < .01$ ）。Ryan 法による多重比較を行なったところ、

表 1 回答者の基本情報における単純集計

質問項目	回答	度数	比率
問 5_1：年齢	20 歳代	1	1%
	30 歳代	55	51%
	40 歳代	46	43%
	50 歳代	1	1%
	60 歳以上	1	1%
	無記入	3	3%
問 5_2：続柄	父親	2	2%
	母親	102	95%
	祖父	0	0%
	祖母	1	1%
	その他	1	1%
	無記入	1	1%
問 5_3：子どもの性別	男児	54	50.5%
	女児	48	44.9%
	無記入	6	5.6%
問 5_4：子どもの人数	1 人	7	7%
	2 人	53	50%
	3 人	37	35%
	4 人	9	8%
	無記入	1	1%
問 5_5：子どもの学年	1 年生	29	27.1%
	2 年生	39	36.4%
	3 年生	38	35.5%
	無記入	6	5.6%
問 5_6：きょうだいとの関係	長子・一人っ子	68	63.6%
	次子	34	31.8%
	無記入	12	0.9%
問 5_7：育児経験の有無	あり	68	63.6%
	なし	34	31.8%
	無記入	5	4.7%

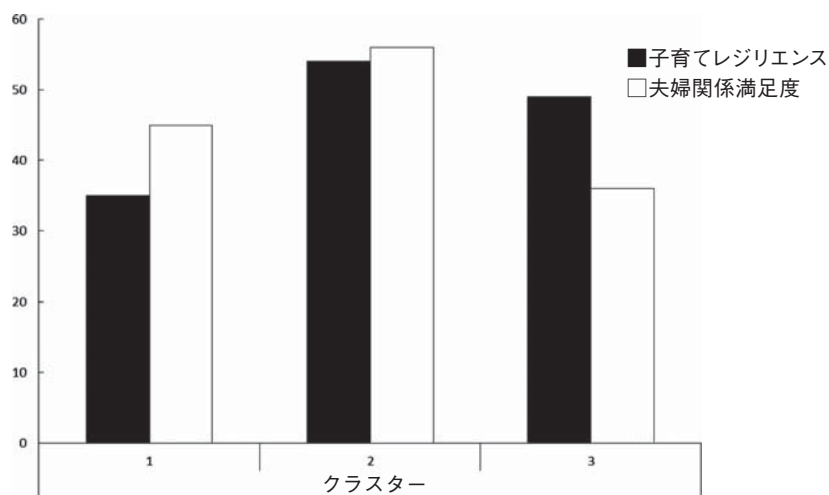


図 1 各クラスター平均のグラフ

全てのクラスターの間で差が有意だった。

次に、クラスター 1~3 において夫婦関係満足度の違いを調べるために、1 要因分散分析を行なった。その結果、クラスターによる違いが確認された ($F(2,104) = 87.51, p < .01$)。Ryan 法による多重比較を行なったところ、全てのクラスターの間で差が有意だった。

子育てを行うにあたってどのような時にネガティブな感情が湧くかおよびどのような時にポジティブな感情が湧くかについて尋ねた自由記述データは、計量テキスト分析を用いて分析を行なった。計量テキスト分析とは、計量的分析手法を用いてテキスト型データを整理または分析し、内容分析 (content analysis) を行う方法である

(樋口, 2014)。樋口 (2014) は、計量テキスト分析においては、量的な分析を行うことでデータの全体像が明らかになるとともに、量的な方法ではすくいとることが難しい、質的データのおもしろさとよばれるような部分がより明確になると述べている。分析の手順は、樋口 (2014) を参考にして行なった。まず、回答が得られた自由

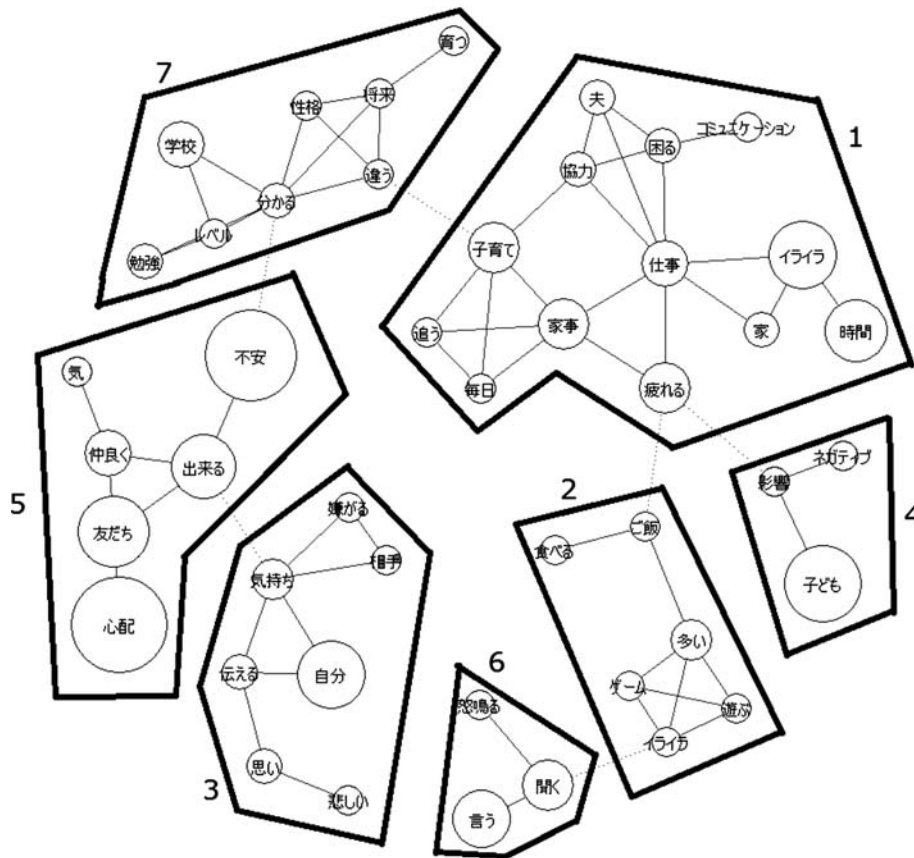


図2 クラスタ1における共起ネットワーク (ネガティブ)

表2 クラスタ1におけるネガティブな感情を感じる際の事情別内容とその頻度

No	事情	内容	合計件数(%)
1	子どもの性格・行動	すぐに諦めるので不安、ネガティブなところが心配、手が出るので不安、言葉遣いが乱暴でないか、チャレンジしないので不安、飽きっぽい等	18 (18.4)
2	友人関係	いじめに遭っていないか、友だちと仲良く出来ているか、友だちとのコミュニケーションがしっかり取れているか、友だちをいじめていないか心配等	17 (17.3)
3	母親に関するもの	仕事・家事・子育てで疲れる、自分の時間がもう少し欲しい、自分の思うように育ててしまう、イライラしていると子どもに優しく接することが出来ない、子育てが人並みに出来ているか心配等	16 (16.3)
4	学校・勉強に関するもの	挨拶がしっかり出来ているか、授業をしっかり聞いているか、勉強についていけるか不安、宿題を全くやらない、学校で楽しくやっているか心配等	14 (14.3)
5	コントロール不能感	言う事を聞かない、ゲームをやると約束を守らない、何事にも時間がかかり物事が進まないのでイライラする等	9 (9.2)
6	子どもの発達・健康	健康に育ってくれるか心配、両親ともネガティブ気質のため、子どもに良い影響を与えないと心配している、子どもが病気にかからないか不安等	6 (6.1)
7	周囲のサポート	夫が子育てに協力的でないのでイライラする、実家が遠くて助けが受けられない時大変、義母と子育ての方針が違うとイライラする等	5 (5.1)
8	将来への不安	将来ちゃんとした大人に育つか不安、思春期になるとどうなるか、女子の性についてこれから色々教えていけるのか不安、自分と子どもの性格が違うので、将来的に分かり合えるのか不安	4 (4.1)
9	その他	時間にもお金にも余裕がない、夫が子どもにきつく言う時辞めてほしいと思う、家が古くて狭いので室内遊びが思うようにさせてあげられないのかわいそう等	9 (9.2)

記述をデジタルデータ化し、「KH Coder」(樋口, 2004)を用いて分析を行った。自由記述での回答のため、「夫」「旦那」「主人」「父親」など同じ意味を表す語は、「夫」など1つの表現に統一した。

次に、出現パターンの似通った語、すなわち共起の程度が強い語を線で結んだネットワークが描くことができる。共起ネットワークを作成した(樋口, 2014)。互いに強く結びついた部分ごとに、語を自動的にグループ分けしており、同じグループ内の語同士については結びつきを実線で示し、グループをまたがる結びつきは点線で示した(友枝, 2015)。円の大きさは語の出現数を表し、語の出現数が多いほど円が大きいことを意味する。また、線で囲まれた部分はカテゴリーを意味する。実線と破線の違いは、共起関係にある語が、同じカテゴリーに含まれているかどうかである。

クラスター1(レジリエンス低夫婦関係満足度高群)におけるネガティブ感情の自由記述の共起ネットワークを図2に示す。全体的な共起傾向から7個のカテゴリーが抽出された。

次に、清水ら(2006)にならい、クラスター1(レジリエンス低夫婦関係満足度高群)でネガティブ感情が湧く際の事情を分類した(表4)。1つの質問に対して複数の内容が記載されている場合は、それぞれ別の内容として1件とし、その頻度を単純集計した。

次に、クラスター2(レジリエンスおよび夫婦関係満足度高群)におけるネガティブ感情の自由記述の共起ネ

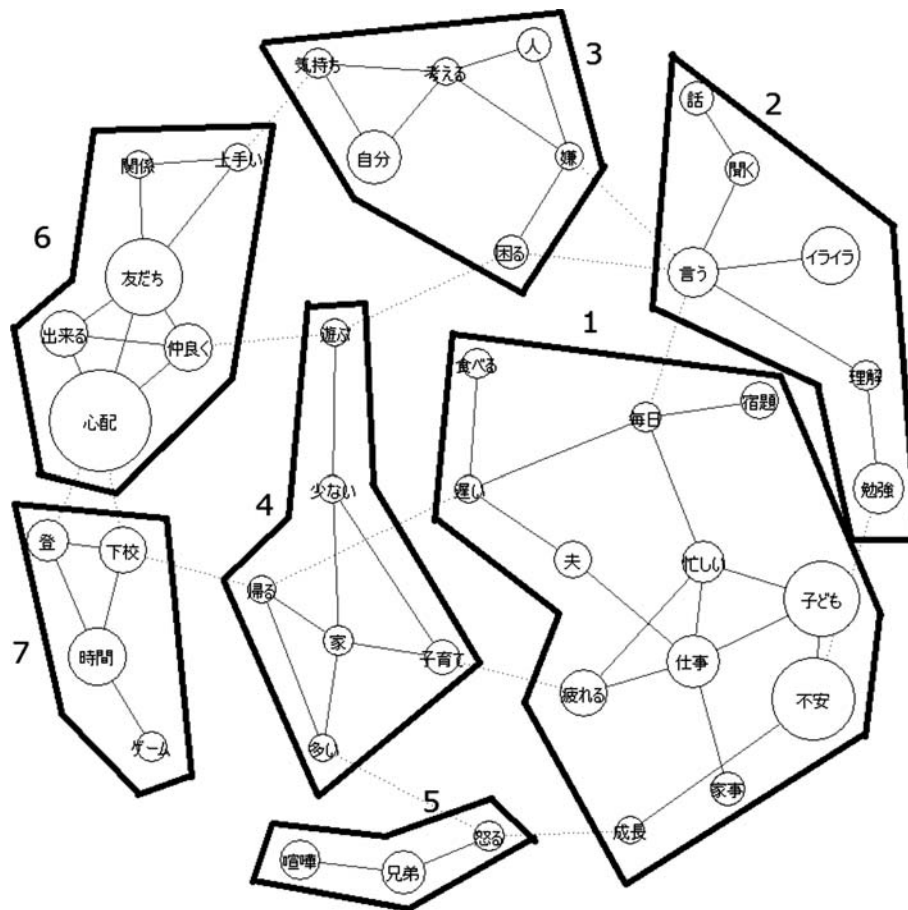


図3 クラスター2における共起ネットワーク(ネガティブ)

表3 クラスター2におけるネガティブな感情を感じる際の事情別内容とその頻度

No	事情	内容	合計件数(%)
1	子どもの性格・行動	自分の思いを表現できているか、痲癢を起こした時、嘘をつかれた時悲しい、散らかしたものを片付けられない、だだをこねられると疲れる、自分のことがなかなか自分でできない等	49 (17.7)
2	学校・勉強に関するもの	勉強についていけないか、宿題に集中できない、先生の話を開けているのか不安、不登校にならないか不安、学校でどのように過ごしているか、登校時行きたがらない、今後の進路や受験などの相談がしにくい等	48 (17.3)

表 4 クラスター 3 におけるネガティブな感情を感じる際の事情別内容とその頻度

No	事情	内容	合計件数(%)
1	子どもの性格・行動	言葉遣いが悪い, 反抗的な態度をとるとイライラする, 自分に自信がなく消極的なので不安, 自分の意見や意思表示が出来ているか不安, 言った事が守れない時不安等	21 (22.8)
2	学校・勉強に関するもの	勉強は大丈夫か, 学校に行くのを嫌がっていると悲しくなる, 集団で行けないときがあり困っている, 先生の話聞いているか不安, 挨拶・礼儀等ちゃんと出来ているか心配等	16 (17.4)
3	友人関係	友だちと仲良く出来ているか, 友だちがいるのか不安, 近所に同年の子どもがいないので友達との関係が心配等	14 (15.2)
4	周囲のサポート	夫の協力がないうち, 辛いことを共有できない, 夫と意見が合わない時怒れるし疲れる, 母子家庭なので相談がなかなかできないことでストレスが溜まる, 家族と子育ての方針が違う等	13 (14.1)
5	母親に関するもの	家庭で子どもとの時間が少なく不安, ママ友とのトラブル等で気を遣う, 仕事・家事・育児の両立に疲れる, 自分の子育てに問題があると自分を責めることも多々ある, 自分ばかり子どもの心配をしていて疲れる, 子どもにとって愛情不足と感じてないか不安等	10 (10.9)
6	将来への不安	将来人に迷惑をかけたか非行に走ったりしないか不安になるときがある, 母子家庭のため金銭面で将来が不安, 面倒くさいや疲れたが口癖になっていて将来が不安等	4 (4.3)
7	コントロール不能感	言うことを聞かない, 同じことを何度言っても理解してくれない時等	4 (4.3)
8	兄弟関係	兄弟喧嘩をして困る等	3 (3.3)
9	登下校	歩いて下校することがほとんどないため体力が付かないのではと不安に思う, ランドセルが重くて登下校も時間がかかるので心配等	3 (3.3)
10	子どもの発達・健康	夫婦不仲な事が子どもの心の成長に悪い影響を与えているのではないかと心配になる, 食事の好き嫌いがあるので病気になったりしないか心配等	3 (3.3)
11	その他	お金がかかるので不安	1 (1.1)
事情別合計件数			92

ットワークを図 3 に示す。全体的な共起傾向から 7 個のカテゴリーが抽出された。

次に, 清水ら (2006) にならい, クラスター 2 (レジリエンスおよび夫婦関係満足度高群) でネガティブ感情が湧く際の事情を分類した (表 6)。1 つの質問に対して複数の内容が記載されている場合は, それぞれ別の内容として 1 件とし, その頻度を単純集計した。

次に, クラスター 3 (レジリエンス高夫婦関係満足度低群) におけるネガティブ感情の自由記述の共起ネットワークを図 4 に示す。全体的な共起傾向から 7 個のカテゴリーが抽出された。

次に, 清水ら (2006) にならい, クラスター 3 (レジリエンス高夫婦関係満足度低群) でネガティブ感情が湧く際の事情を分類した (表 8)。1 つの質問に対して複数の内容が記載されている場合は, それぞれ別の内容として 1 件とし, その頻度を単純集計した。

第 3 節 各クラスターによるポジティブ感情自由記述の特徴

クラスター 1 (レジリエンス低夫婦関係満足度高群) におけるポジティブ感情の自由記述の共起ネットワークを図 5 に示す。全体的な共起傾向から, クラスター 1 (レジリエンス低夫婦関係満足度高群) では 7 個のカテゴリーが抽出された。

次に, 清水ら (2006) にならい, クラスター 1 (レジリエンス低夫婦関係満足度高群) で子育て中にポジティブ感情が湧く際の事情を分類した (表 10)。1 つの質問に対して複数の内容が記載されている場合は, それぞれ別の内容として 1 件とし, その頻度を単純集計した。

次に, クラスター 2 (レジリエンスおよび夫婦関係満足度高群) におけるポジティブ感情の自由記述の共起ネットワークを図 6 に示す。全体的な共起傾向から 8 個のカテゴリーが抽出された。

次に, 清水ら (2006) にならい, クラスター 2 (レジリエンスおよび夫婦関係満足度高群) でポジティブ感情が湧く際の事情を分類した (表 12)。

次に, クラスター 3 (レジリエンス高夫婦関係満足度低群) におけるポジティブ感情の自由記述の共起ネット

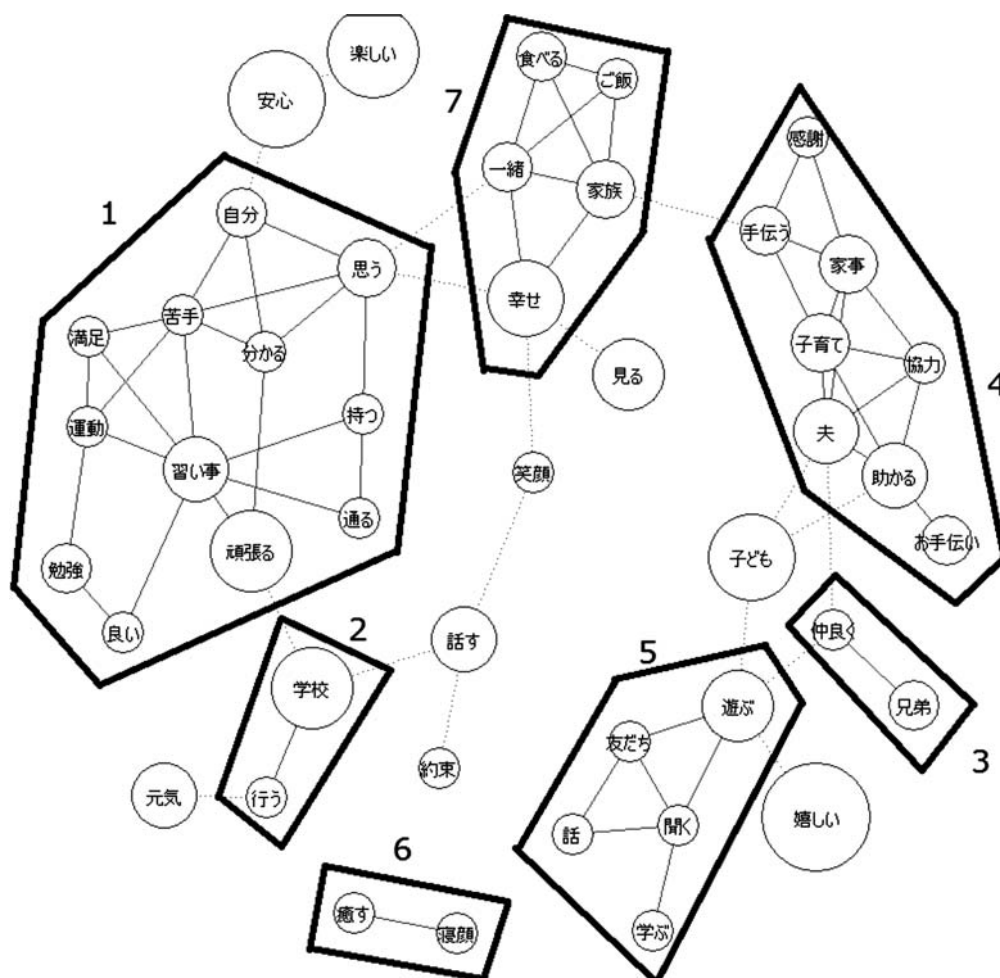


図5 クラスタ1における共起ネットワーク（ポジティブ）

表5 クラスタ1におけるポジティブな感情を感じる際の事情別内容とその頻度

No	事情	内容	合計件数(%)
1	子どもの仕草・関わり	甘えて抱きついてくる時など可愛い、笑顔で話してくれると幸せ、寝顔を見ると生まれてきてくれてありがとうという気持ち、ふとした時に可愛い幸せと思う等	18 (24.7)
2	学校・勉強に関するもの	楽しく学校へ行っている、懇談会の時先生から子どもの様子を聞いて嬉しい、勉強も頑張れており安心している等	13 (17.8)
3	周囲のサポート	夫が家事や子育てを手伝ってくれて助かっている、実の両親が子どもの面倒を見てくれるので助かっている、祖母が子育てをほとんど引き受けてくれるので有り難い等	33
4	家族団欒・日常生活	家族と一緒にご飯を食べている時が幸せ、兄弟揃ってリビングでくつろいでいるのを見ると安心する、夫と子どもたちが楽しそうにしている等	10 (13.7)
5	友人関係	友だちも多くいるようで安心している、友だちと遊んだ話を聞くと嬉しい等	4 (5.5)
6	習い事	目標を持って習い事に通っている、習い事を頑張っているのが嬉しい等	4 (5.5)
7	子どもの成長・健康	元気に過ごしているのが安心、元気で、何でも話してくれることがあったりすると嬉しい等	4 (5.5)
8	子どもの優しさ	お手伝いをしてくれる時があるので助かる、人を思いやれる心を持っており嬉しく思う等	4 (5.5)
9	子どもの頑張り	毎日頑張っている様子が伝わってくると安心する、とても活発で積極的なので、新しいことを自分でどんどん吸収している、何でも頑張るので自慢である等	4 (5.5)
10	その他	我が子ながら尊敬する	1 (1.4)

事情別合計件数 73

10	友人関係	必要とし合える友達がいる, 仲良しの友だちが出来てよかった等	4 (4.6)
11	お手伝い	お手伝いをしてくれるので嬉しい等	3 (3.2)
12	子どもの存在	子どもと一緒にいると楽しいし癒される, 子どもがいるからこそ色々なことに取り組みるので感謝	2 (2.1)
事情別合計件数			94

ワークを図 7 に示す。全体的な共起傾向から 9 個のカテゴリーが抽出された。

次に, 清水ら (2006) にならい, クラスタ 3 (レジリエンス高夫婦関係満足度低群) でポジティブ感情が湧く際の事情を分類した (表 14)。1 つの質問に対して複数の内容が記載されている場合は, それぞれ別の内容として 1 件とし, その頻度を単純集計した。

第 4 章 考 察

第 1 節 ネガティブ自由記述における考察

子育てレジリエンスと夫婦関係満足度の組合せでクラスタ分析を行なったところ, 3 つのクラスタに分かれた。その後, それぞれのクラスタで共起ネットワークを作成したところ, 3 つ全てのクラスタでの記述において明らかな特徴は見られず, どのクラスタにおいても, 友人関係について, 家事と育児と仕事の両立について, 学校関係について, 自分の気持ちを伝えることができているかなどといった記述が共通して見られた。また, 幼児期では見られない児童期特有のものとして, 習い事や登下校に関しての記述も見られた。

具体的な自由記述から細かく分類したところ, 全てのクラスタで「子どもの性格や行動」において最も出現頻度が高かった。クラスタ 1 (レジリエンス低夫婦関係満足度高群) では, 「自分の思いを表現できているか」などといった, 自分の気持ちを相手に表現できているかどうかについての心配や不安が多く記述されていた。クラスタ 2 (両高群) において, 特に特徴的であった記述は, 「段々と大きくなり, 大人になっていくのが嬉しいが寂しい」といった両価的な気持ちを抱いている母親もいることが明らかとなった。クラスタ 3 (レジリエンス高夫婦関係満足度低群) では, 他のクラスタと異なり, 母子家庭についての記述が見られたのが特徴的だった。

ネガティブ自由記述全体から, 最も多かった記述が, 友人関係についてであった。児童期の子どもを育てる母親が最も重要視しているのが友人関係であることが示唆された。幼児期までは, 多くの時間を母親と共に過ごすのが, 小学校入学を機に活動範囲が広がり, 学校という集団で過ごす時間の方が家族と過ごす時間よりも長くなる。そのために, 親の目の届かないところでの友人関係が気がかりになるのではないかと考えられた。また, 友人関係の記述の中には, いじめにあっていないかということや, 逆に友だちをいじめていないかということなどのいじめに対する不安や心配の記述も見られた。小学生になると, 物理的な行動範囲も広がるが, 対人関係も広がってくる。幼児期とは異なり, 親よりも友人との関わりが増える。さらに, 子どもにとって友だちと遊ぶことは, 社会性を育むことに関してとても重要であると言える。前田 (2004) によると, 集団で協同遊びや共同活動をするなかで, 子どもは役割, 責任, 協力, 約束, 思いやりなどの大切さを知り, 社会的ルールを守ることやリーダーシップの必要性を学ぶと述べている。以上から, 友人関係について不安を抱くことが最も多いということが考えられる。

登下校についての記述も多く見られた。登下校時, 無事に家に帰ってくるのか心配, 事故や事件に巻き込まれないか不安などといったことが記述されていた。内田・仲・清水 (2010) によると, 特に子どもが犯罪に巻き込まれやすいのは, 子どもの行動範囲が家の中から近所, さらに小学校へと広がるときであると述べている。また, 警視庁交通局 (2018) は, 小学校 1 年生の歩行中の死者数は小学校 6 年生の 8 倍であり, 登校中・下校中の事故が最も多いと述べている。このように, 小学校低学年における事件や事故が多いことから, 母親は登下校中の子どもについての不安を感じるが多いと考えられる。

また, 子どもに関しての記述も多く見られた。具体的には, 順調に育っているか不安, 体型の細さが気になるなどといった発達に関するものから, 病気をしたり怪我をしたりしないかなどの健康に関するものも見ら

れ、幼児期の子どもを育てる母親が抱く不安と共通していた。

村上他（2005）の乳幼児をもつ母親を対象とした育児ストレスに関する研究では、「子どもの発達に関する懸念」の因子の中に、主に、「子どものことばの発達に気がかりがある」や「食事、排泄、着替えなどをしつけるがなかなか身に付かない」など乳幼児特有のものが見られている。しかし、今回の結果では、子どもの発達についての記述は多く見られたが、「体型の細さが気になる」や「よく怒ってしまうので成長に影響しないか不安」などといった記述が多かった。

また、宮脇・山本（2006）の思春期の子育て不安に関しての研究では、「友達関係と子どもへの対応についての不安」「夫と周りのサポートについての不安」「学校生活と子どもの行動についての不安」の3因子が抽出されている。今回の結果では、思春期の子育て不安と共通していたが、新たに習い事に関するもの、登下校に関するものなど、児童期特有のものが見られた。

第2節 ポジティブ自由記述における考察

子育てレジリエンスと夫婦関係満足度の組合せでクラスター分析を行って抽出された3つのクラスターにおいて、共起ネットワークを作成したところ、3つ全てのクラスターで明らかな特徴は見られなかった。どのクラスターにおいても、「子どもの仕草や関わり」「周囲からのサポート」「学校・勉強」などといった記述が共通して見られた。

クラスター1（レジリエンス低夫婦関係満足度高群）では、3つのクラスターの中で最も周囲のサポートに関する内容が多く記述されていた。クラスター2（両高群）では、子どもの存在についての記述もあり、「自分が生きている価値を見出せた」などが見られた。子どもがいるからこそ自分の存在意義や存在価値を見出している母親もいることが明らかにされた。クラスター3（レジリエンス高夫婦関係満足度低群）では、他に比べて、周囲のサポートよりも子どもに関することについてポジティブ感情が湧くという結果となった。

3つのクラスターに共通して見られたのが「子どもの優しさ」「お手伝い」についてであった。子育て中の母親にとって重要となるのがソーシャルサポートであるが、乳幼児期の子どもを育てる母親にとってのソーシャルサポートは、夫や周りの人からであったが、児童期の子どもを育てる母親にとっては、夫や祖父母等周りの人からのサポートに加えて、「子どもがお手伝いをしてくれる」や「子どもが優しい言葉かけをしてくれる」などといったような、子どもからのサポートもポジティブな感情が湧く場面であることが示唆された。

ポジティブ自由記述全体からは、最も多かった記述が学校に関わる記述と、友人関係の記述であった。児童期になり、初めての集団生活で不安を感じる親は多いことが予想されるが、学校生活など目に見えない場所であるからこそ、学校での出来事を聞いたり、楽しんで学校へ行く姿を見ると安心するのではないかと考えられる。

また、子どもや家族と一緒に過ごす時間が幸せといった何気ない日常生活に関する記述も多く見られた。特に大きな出来事はなくても、日々の何気ない生活の中でも幸福感や安心感を抱いていることが示された。さらに、夫や祖父母などが子育てを手伝ってくれるなどの記述も多かった。先行研究では、母親にとって周囲からのサポートは不安を緩和させることが示されているが、今回の結果では、夫や祖父母など周囲からのサポートを受けた時にポジティブな感情が想起するということが示唆された。先行研究と同様に、子育てをしている母親にとって周囲からのサポートは重要であることが分かった。

第3節 ネガティブとポジティブを含めたクラスターごとの特徴

共起ネットワークから、クラスター1（レジリエンス低夫婦関係満足度高群）とクラスター2（レジリエンス及び夫婦関係満足度高群）を比較すると、クラスター3（レジリエンス低夫婦関係満足度高群）では、夫の行動が悪い影響を与えているなどの夫に関する円が大きかったことから、夫に関してネガティブな感情が想起していることが示唆された。また、ポジティブにおいては、クラスター3（レジリエンス低夫婦関係満足度高群）では、他の2つのクラスターよりも夫からのサポートに関する円が小さかった。母子家庭の記述が含まれているということも関係していると考えられる。一方で、ポジティブの記述で比較的大きな円だったのが、子どもが学校へ休まずに行ってくれることが嬉しいという内容に次いで、子どもと過ごす時間が幸せという内容の円が大きかった。このことから、レジリエンス低夫婦関係満足度高群の母親にとって子どもの存在は特に大きく、子どもから幸せ

を見出しているということが考えられる。

どの群も、ネガティブにおいて最も友人との関係についての不安や心配があるが、ポジティブにおいても友達と仲良く遊んでいる姿を見ると嬉しいなど、最も友人関係においての円が大きかった。児童期の子どもを育てる母親が友人関係を最も重要視しているため、最もネガティブな感情を抱きやすいと考えられる。さらに、最も友人関係を気にしているからこそ、友人と良好な関係だということが分かるとポジティブな感情が湧くのではないかと考えられる。

クラスター2(レジリエンス及び夫婦関係満足度高群)は、クラスターごとの人数の違いもあり出てくる多様さが異なっていた。クラスター2(レジリエンス及び夫婦関係満足度高群)では、他のクラスターに比べてネガティブの円が全体的に小さかった。また、クラスター2(レジリエンス及び夫婦関係満足度高群)では、夫の他に祖父母の円もあり、ソーシャルサポート源が多いことを示していると考えられる。

クラスター3(レジリエンス低夫婦関係満足度高群)では、イライラについて他のクラスターよりもさまざまな要因に関連していることが特徴である。子どもが言うことを聞かない時にイライラするといったことや、支度が遅い時にイライラが湧いていることが分かる。母親の思い通りにならず、子どもをコントロールすることが不可能なときにイライラが想起していると考えられる。

クラスター1(レジリエンス低夫婦関係満足度高群)とクラスター3(レジリエンス低夫婦関係満足度高群)は、友人関係において不安と心配が同じカテゴリーに入っているが、クラスター2(レジリエンス及び夫婦関係満足度高群)は心配のみであり、友人関係についてではなく、子どもに関して不安に感じているという違いがみられた。

第4節 子育て支援について

本研究では、児童期の母親にも子育て不安があり、児童期特有の子育て不安の内容が明らかとなった。

「登下校」に関する記述があったことから、地域との関わりや学校での防犯に関しての取り組みが必要になってくると考えられる。

また、ポジティブ感情が湧く場面で、「学校での出来事や友だちとのことを話してくれるとき安心する」などといったような、子どもが親の目の届かないところでの話をしてくれると安心するといった記述も多くみられたことから、家庭でのコミュニケーションが重要となってくると考えられる。

特に、クラスター3(レジリエンス高夫婦関係満足度低群)においては、母子家庭であるということに加えて子育てレジリエンスが低い母親がクラスターに存在した。クラスター3(レジリエンス高夫婦関係満足度低群)のポジティブな共起ネットワークからは子どもと過ごす時間が幸せという記述が多く、母親にとって子どもの存在が大きいことが示された。このことから、そういった母親への支援については、ネガティブな出来事ばかりではなく、子育て中に感じるポジティブな出来事について語ることで、「安心」、「感謝」、「嬉しい」といった感情を再認識し、ポジティブな感情を想起することが出来るのではないかと考えられる。この事は、全ての母親に有効であると考えられる。

更に、子育て・家事・仕事を両立している母親が多く、サポート源を増やすことで自分の時間を作ったりすることができ、ゆとりを持てるのではないかと考えられる。また、地域の施設を利用したり他の母親との交流の機会などを設けることで、同じ悩みや不安を共有でき、子どもとの関わりについてヒントを得たり、共感しあえることも不安を軽減させ、有効であると考えられる。

引用文献

- 荒牧美佐子・無藤 隆(2008). 育児への負担感・不安感・肯定感とその関連要因の違い: 未就学児を持つ母親を対象に 発達心理学研究, **19**, 87-97.
- Baraitser & Noack, A. (2007). Mother courage: Reflections on maternal resilience. *British journal of psychotherapy*, **23**, 171-188.
- 枝廣淳子(2015). レジリエンスとは何か 東洋経済新報社
- 樋口耕一(2004). 社会調査のための計量テキスト分析 ナカニシヤ出版
- 岩田純一・佐々木正人・石田勢津子・落合幸子(1995). <ベーシック現代心理学3> 児童の心理学 有斐閣.
- 警視庁交通局(2018) 児童・生徒の交通事故.

- 興石薫 (2005). 育児不安の発生機序と対処方略 風間書房
- 前田健一 (2004). グループで遊ぶ 無藤 隆・岡本祐子・大坪治彦 (編著) よくわかる発達心理学 ミネルヴァ書房 88-89.
- 牧野カツコ (1983). 働く母親と育児不安 家庭教育研究所紀要, 4, 67-76.
- 丸山知子・吉田安子・杉山厚子 (2004). 妊娠期・出産後2年間の女性の心理・社会的状態に関する調査 第4報 産後2年目の夫婦関係と育児および心身の状態 日本女性心身医学雑誌, 9, 74-81.
- 宮脇克実・山本真由美 (2006). 思春期の子育て不安尺度の作成 徳島大学総合科学部人間科学研究, 14, 61-71.
- 諸井克英 (1996). 家庭内労働の分担における衡平性の知覚 家族心理学研究, 10, 15-30.
- 村上京子・飯野英親・塚原正人・辻野久美子 (2005). 乳幼児を持つ母親の育児ストレスに関する要因の分析 小児保健研究, 64, 425-431.
- 尾野明未・奥田訓子・茂木俊彦 (2011). 子育てレジリエンス尺度の開発の試み 日本ヒューマン・ケア心理学大会プログラム・発表論文集, 13, 65.
- 尾野明未・茂木俊彦 (2011). 障害児をもつ母親の子育てレジリエンスに関する研究 心理学研究, 2, 67-77.
- 小野寺敦子 (2009). 手にとるように発達心理学がわかる本 かんき出版
- 榊原洋一 (2004). 小児科学の立場から 大日向雅美 (編著) 特別企画育児不安こころの科学 29-35.
- 清水嘉子・伊勢カンナ (2006). 母親の育児幸福感と育児事情の実態 母性衛生, 47, 344-351.
- 武内珠美 (2004). 子育ての楽しさつらさ 無藤 隆・岡本祐子・大坪治彦 (編著) よくわかる発達心理学 ミネルヴァ書房 128-129.
- 寺見陽子 (2015). 母親の育児ストレスの背景とソーシャルサポートに関する研究：母親の成育経験と子育て環境との関連 神戸松陰女子学院大学人間科学部紀要, 4, 59-73.
- 友枝敏雄 (2015). リスク社会を生きる若者たち 高校生の意識調査から 大阪大学出版会.
- Travis, W. J., & Combs-orme, T. (2007). Resilient parenting: Overcoming poor parental bonding. *Social Work Research*, 31, 135-149.
- 内田伸子・仲 真紀子・清水由紀 (2010). 子どもの暮らしの安全・安心：子どもの安全教育の新しいアプローチ 発達心理学研究, 21, 309-310.
- 山口・佐藤・遠藤 (2014). 未就学児をもつ父親の育児行動と母親の育児負担感との関連 母性衛生, 54, 495-503.
- 吉田弘道 (2012). 育児不安研究の現状と課題 専修人間科学論集心理学篇, 2, 1-8.